射す光

貴方は細い足で軽々と歩いていた
貴方は太い足で力強くペダルを踏んでいた
そんな多彩な貴方を、僕は腕組みして見つめてた
泥にまみれた身体を白い服に包んで、僕は

都会から背負(しょ)ってきた瞳の痛みが

ますます瞼を硬直させても構わなかった
優しいものを見つめるのはいつでも辛いもの
暖かいものはいつでも哀しいもの

貴方の歩みは日の光の道の上(え)を行くけれど

僕は暖かな光にあたれば死んでしまう
そして貴方は行くでしょう
僕はその道を下から両手で支えたい

僕はいつもカタコンブで祈りを捧げる
この鉄格子の小さな窓から、ああ、何時までも
貴方の発する、暖かいが故に哀しい光が
ああ、何時までもこの暗い部屋に差し込みますように

(1982.3.4 & 4.17)